

110 学年度第一学期 Eurasia 基金会国際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」系列講次(1)

講題：台湾における日本研究：過去・現在・未来

中国文化大学 110 学年度 Eurasia 基金会国際講座第 1 回は、先ごろ日本の外務大臣表彰を授与された徐興慶校長の「台湾における日本研究：過去・現在・未来」である。最初に徐校長は本課程の始まった経緯を話し、日本研究とは何か、それから台湾の日本研究の歴史について解説した。また自身の日本研究への貢献を例に、台湾における日本研究の未来の方向性と課題に論及した。

日本研究とは何か—世界から見ること

徐校長は台湾での日本研究がかなり早くスタートしたことを指摘する。1972 年に台日断行があったものの、経済、文化、教育各方面で緊密な交流は引き続き長く維持された。日本研究と日本語教育は一心同体である。1962 年に本校に成立した東方語文学系日文組は国内初の日文系である。現在台湾の日本語関係の学科は 40 か所を数え、日本語教育はめざましく発展し、世界の国々に引けを取らない。ただし日本研究の高等教育の場となるとまだ明らかに不足している。「日本研究の定義」から見ると、日本研究は「日本学 (Japanology)」、「日本関連研究 (Japanese Studies)」、「日本研究 (Japan Studies)」に分けられる。「日本学」は日本の言語、文化、歴史などを研究する学問分野で、江戸時代に長崎の出島にいたオランダ人が横浜に設立した日本アジア学会が重要な歴史的記念碑である。「日本研究」は日本に関する研究の総称である。例えばアメリカでは、19 世紀後半の日本研究は主にその神秘性、エキゾチシズムに注目していた。日本軍がパールハーバーを奇襲攻撃するにいたって、アメリカはようやく本式に日本を注視するようになった。人類学者ルース・ベネディクトはアメリカ政府の委託を受け、第二次大戦末期に日本研究の古典『菊と刀』を著わし、日本国民の性格を分析した。同書は出版から長い月日が経つが、いまだに古びていない。とはいえ内容に問題がないわけではなく、学者たちからさまざまな批判が出ている。その後 70 年代にアメリカはさらに積極的に日本の政治、経済の専門家を養成した。80 年代後半には「日本見直し論」を唱える学者が出てきた。その後、徐校長は欧米、アジアの日本研究の統計数値を紹介した。世界の日本研究は「社会科学」「人文科学」「言語文学」がそれぞれ 35%、35%、30%を占め、ほとんど大差ないといってよい。

台湾における日本研究—回顧と発展

話を台湾の日本研究に絞ると、重要な段階は台日の国交が正常化していた1952-1972年である。この段階は台日政治、外交、経済貿易をメインとし、人文社会科学研究は系統的ではなかった。その後の1973-2006年は台日断交の期間であるが、少しずつ既成の研究方向を脱し、主に学校や研究機関による交流が進み、人文研究も頭角を現してきた。90年代中期、日本側は住友財団以外に交流協会を中心に「日台交流センター」が発足し、植民地期の文献に関心を向けていった。台湾では中央研究院の「東北アジア地域研究」等がある。また2010年に徐校長は台湾の日本研究の可能性を考えるために、論壇「台日相互理解の思索と実践」を開催し、元文化庁長官青木保を講演に招いた。会議の中で次の重要な方向性が指摘された。国境を越えた、地域研究の重要性。台湾の堅実な日本語教育から人材育成へとつなげること。東アジア各国が協力し、世界各地の研究機関と横の連結を持つこと。人文と社会科学が対話する場所の確立など。

台湾における日本研究—時代に応え、相互補完的機能を持つ

今日の台湾の日本研究の問題は統整の欠如にあると徐校長は指摘する。すなわち研究組織の分散、日本語教育と日本研究のつながりの欠如、進学ルートの整備の必要などである。近年東アジア地域各国は歴史認識と領土問題をめぐって対立し、さらに最近では新型コロナの猛威により、人類の健康と安全は脅威にさらされている。台湾は地震、災害、漁業権、医療などで日本と同じ課題に直面しており、日本研究を今後いかに根付かせるか、各方面で交流、協力、協議する人材を育成するかは重要な課題である。徐校長は「他山の石」に触れ、例えば台湾の高速鉄道が日本の新幹線システムを採用していること、日本の少子高齢化対策など台湾が参考にできると述べる。学生に対しては日本文化の認識が表層にとどまるのではなく、もっと台日経験を吸収して相互補強するよう促した。

台湾における日本研究—現在と未来

台湾大学日本研究センター設立に尽力した徐校長は、今、新たな世代の日本研究者の育成、人文と社会科学の対話と学術ネットワークの確立に力を入れている。近年は次の活動を行っている。①全国研究生研習会。②日本学研究叢書：現在すでに35巻出版されており、台湾から日本を見る視点として唯一無二である。③国際学術論壇：第一線で活躍中の学者を招き、国際学術論壇を開催して

いる。例えば台湾大学日本研究論壇（2015年）、第四回東アジア日本研究者協議会（2019年）、第六回アジア未来論壇前年祭（2021年）は特筆すべき成果であり、台湾の見識を高め、若い研究者に発表の機会を提供し、学術ネットワークの構築に役立った。本講義の最後に、徐校長は日本研究の未来の展望に向け、次のことを提案した。共同研究モデルの追求。知日人材の養成。世界に開かれた台湾日本研究。国家レベルの「日本研究センター」の設立。人文社会、政治、経済貿易、科学技術、産業の五方面の連関性の促進である。台日関係の中でも政治、外交、法律、国防等の局面の打開は難しいが、文化、観光、教育、産業経済は比較的容易である。台湾にとって、日本研究の意義と価値は彼を知り己を知ることであり、実質的な関係を高め、台日学術交流の場を設け、政府が進める台日関係の知恵袋となることである。最後に、若い研究者が知日人材となり、互助互恵的な台日関係の構築に役立つよう激励した。

(Web サイト: <https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>)

(撰稿:黄馨儀・日文系副教授)

(日本語訳:塚本善也・日文系副教授)